

幼稚園から小学校への滑らかな接続を目指して －幼稚園と小学校の連携の在り方－

指導主事 石井明子

Isii Akiko

要 旨

子どもたちに「生きる力」をはぐくむための教育課程について、近年、校種を越えた一貫性が求められている。特に幼稚園教育と小学校教育においては、幼児期の遊びを中心とする保育から、児童期の学習を中心とする指導への移行を滑らかにし、一貫した流れをつくり出すことが大切である。そのためには、幼稚園と小学校がそれぞれの教育の目的、子どもの発達の姿、指導の方法等について相互理解を深め、連携・交流の機会をより充実し、共通理解を図る必要があると考える。

キーワード： 交流、連携、滑らかな接続、学びの連続性、学びの基礎、協同的な学び

1 はじめに

平成13年3月に「幼児教育振興プログラム」が文部科学省から示され、地域の実情に応じて様々な幼児教育の振興に関する取組が行われてきた。にもかかわらず、基本的な生活習慣や態度が身に付いていない、コミュニケーション能力が不足し、他者とのかかわりが苦手である、自制心や規範意識が十分に育っていない、運動能力が低下しているなどの課題があることや、小学校一年生などの教室において、学習に集中できない、教員の話が聞けずに授業が成立しないなど学級がうまく機能しない状況も見られることが、中央教育審議会（以下、中教審という）においても指摘されている。

このような状況を踏まえ、中教審は、平成17年1月に、「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」の答申を出し、幼児教育の充実を図るための今後の方向性を示した。この答申は、幼児期における教育の重要性を、生涯にわたる人間形成という視点でとらえているところに特徴がある。そして、そのキーワードの一つとなるのが「学びの連続性」である。

「学びの連続性」には、家庭、地域、幼稚園等との間のいわゆる「横の連続性」と、幼稚園から小学校への「縦の連続性」の二つの連続性があると考えられる。答申は、これらの二つの連続性に注目し、「学びの連続性」をしっかりと踏まえることが、幼児教育の充実につながると述べている。

本稿では、後者の「縦の連続性」に注目し、「学びの連続性」を図る幼稚園と小学校の連携の在り方について考察する。これまでも、幼稚園と小学校の連携の大切さは言われてきた。しかし、その連携は、なかなか進んでいないのが現状である。「自分のところで精一杯なのに、なぜ他の校種を……」という意識もあったかも知れない。しかし、「学びの連続性」という視点に立てば、連携は自身の教育の充実につながるものであり、それは何より、子どもたちの確かな育ちにつながるものである。

2 研究目的

遊びを通して学ぶ幼児期の教育活動から、教科学習等が中心の教育活動への滑らかな接続を目指す

幼稚園と小学校の連携の在り方について、「学びの連続性」の視点に立って考察する。

3 研究内容と考察

(1) 「学びの連続性」に立った幼稚園と小学校の連携とは何か

中教審の答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」は、子どもを取り巻く環境の変化を踏まえ、今後の幼児教育の方向性として、「幼稚園等の施設が中核となって、家庭や地域社会とともに幼児教育を総合的に推進していくことの必要性」と「幼児の生活の連続性及び発達や学びの連続性を踏まえて幼児教育を充実していくことの必要性」を提唱した。特に、「発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実」については、次のとおりである。

1 小学校教育との連携・接続の強化・改善

遊びを通して学ぶ幼児期の教育活動から教科学習が中心の小学校以降の教育活動への円滑な移行を目指し、幼稚園等施設と小学校との連携を強化する。特に、子どもの発達や学びの連続性を確保する観点から、連携・接続を通じて生きる力の基礎となる幼児教育の成果を小学校教育に効果的に取り入れる方策を実施する。

その際、例えば幼稚園においては、園児の八割近くが私立幼稚園に在園していることなどを踏まえ、市町村教育委員会が積極的役割を果たす等して、公立・私立の連携を図りつつ実施することが必要である。

ア 教育内容における接続の改善

- 幼稚園等施設において、小学校入学前の主に5歳児を対象として、幼児どうしが、教師の援助の下で、共通の目的・挑戦的な課題など、一つの目標を作り出し、協力工夫して解決していく活動を「協同的な学び」として位置付け、その取組を推奨する必要がある。
- 遊びの中での興味や関心に沿った活動から、興味や関心を生かした学びへ、さらに教科等を中心とした学習へのつながりを踏まえ、幼児期から児童期への教育の流れを意識して、幼児教育における教育内容や方法を充実する必要がある。
- 幼稚園教育要領等で幼稚園等施設と小学校との連携推進等について、より明確化する必要がある。また、これに関して、将来的には、学校教育法第一条における学校種の規定順序の在り方についても見直すことが望まれる。

イ 人事交流等の推進、奨励

(以下、省略)

子どもの育ちの視点から発達や学びの連続性を考え、それに基づいて保育内容を組み立てるポイントについても述べている。

これまでの「幼稚園と小学校との連携」は、「子どもたちが喜ぶから」、「小学校入学の思いを高めるため」、「入学した子どもが早く小学校に慣れるように」、「今度入学してくる子どもを理解するために」といった目的によるものが多かったように思う。それは、子どもの育ちを見通すという視点に立った連携というよりは、一過性のイベント的な連携であったり、自身の教育活動充実のために外部の施設や機関を活用するといった連携であったりしたのではないだろうか。

したがって、幼稚園においても、小学校においても、自身の教育内容を問い返したり、組み直したりといったところまで至るような「連携」には、なっていなかったのである。

今回の中教審の答申にある「連携」は、教育課程のレベルで幼稚園と小学校の校種を越えた一貫性をもたせ、子どもたちに生きる力をはぐくもうとするものである。幼稚園における今の活動が、小学校においてどう発展するのか、小学校における今の活動が幼稚園からのどのような積み上げによるものなのかといったことに目を向け、指導の進め方を問い直す「連携」である。言い換えれば、幼稚園だけで、あるいは小学校だけで教育課程を考えるのではなく、「学びの接続」という視点に立って教育課程の編成を求めているものである。それは、一過性のイベント的な交流といった連携ではなく、教育課程や教育内容のレベルにおける連携である。したがってそこには、幼稚園から小学校への滑らかな接続が、自ずと生まれてくるのである。

なお、「発達の連続性」については、これまでも、「子どもの発達段階に合わせて……」といった視点でとらえられてきた。一方、「学びの連続性」という視点は、あまり考えられることがなかったものである。特に、「幼稚園の遊びは、単に遊んでいるだけであってはならない。」「小学校の生活科は、単に活動しているだけであってはならない。」など、「学び」という視点で教育活動をとらえていくことの大切さが叫ばれている中、中教審の提唱した「学びの連続性」は、非常に重要な視点であると考えられる。

(2) 幼稚園と小学校の連携の現状

本年度の幼稚園長研修講座において、「幼稚園から小学校への滑らかな接続を目指して」をテーマに、小学校長と幼稚園長の講義や実践発表を通して研修を実施した。以下は、その研修を受講した園長（59名）からの研修後のアンケート結果である。

- 幼稚園と小学校の連携については、いつも頭の中にあっただが少しも具体化しなかった。行事への参加など、イベント的に続けていた交流について見つめ直していきたい。
- 同じ敷地内にありながら、就学前の事務連絡すらできていない状況がある。今後、勇気を出して取り組んでいきたい。
- 今後の方向性を系統的に教えていただいたので、遠い存在であった目の前の小学校が近づいてきた。これから幼稚園として小学校への働きかけを具体的に考えていくことができる。
- 小学校と同じ敷地内にあり、年間を通して活動を共にすることが多くあるが、形式的な交流になっていると気付いた。形式的な連携ではなく、お互いの教育内容を学ぶことができるように働きかけていきたい。
- 小学校へ積極的に出向き、園児や保護者の様子を伝えながら人間関係づくりをしてきたが、これからも積極的に連携を進めていきたい。今日の研修で連携の課題を明らかにすることができた。
- 自園として小学校へどのように働きかけていけばよいかを考えていたところなので、よい示唆をいただいた。幼稚園教育の見えない「学び」をどのように知らせていくか明確にしなければならぬと実感した。

以上のアンケート結果と、筆者自身が幼稚園や小学校を訪問して気付いたことなどから、「幼稚園と小学校の連携」は、次のような現状にあると考える。

- 交流の仕方は、行事への参加などイベント的な交流にとどまったり、生活科の学習の中で相互訪問したりするといったケースが多い。

- 交流に当たり、交流のねらいや仕方について事前に打合せを行い共通理解を図りながら進めることが十分とはいえない状況にある。
- 児童が幼児に「この遊びを教えてあげるよ。」「お店やさんに招待するよ。」というような一方向の活動が多く、幼児は、受け身になりがちである。
- その時間限りの交流やイベント的な交流が多く、初めの出会いが次の交流に発展したり、交流で経験したことが刺激となり幼児の遊びや生活に生かされたり、児童の学習や生活が豊かなものになったりするというまでには至っていないことが多い。

幼稚園や小学校により状況が違うが、同じ敷地内であっても、依然として幼稚園と小学校間には、立ちほだかる壁がまだまだあり、連携が進んでいるとは言い難い状況があるように思われる。また、比較的交流が進められている幼稚園や小学校においても、それぞれの交流の事前打合せを簡単にす程度で、教育の内容や指導についての話し合いにまで取組が進んでいない状況が見られる。

先にも述べたように、「学びの連続性」といった視点に立った連携までには、まだまだ至っていないのである。

(3) 「学びの連続性」を踏まえた具体的な連携とは

では、「学びの連続性」を踏まえた連携とは、具体的にどういったことを進めていくことができるだろうか。そこで、中教審が提起している「協同的な学び」と、最近、特に重要であるといわれている「ことば育て」、「人とのかかわり」の三点について、述べてみたい。

ア 「協同的な学び」

中教審は、「主に小学校入学前の5歳児を対象に、幼児同士が、教員の援助の下で、共通の目的・挑戦的な課題など、一つの目標を作り出し、協力工夫して解決していく活動」を「協同的な学び」とし、小学校への接続に向けての取組として進めるよう提案している。

私たちは様々な対象とのかかわりの中で、様々なものを学んでいる。なかでも、「人」とのかかわりによる学びは、とても大きい。実際に、幼稚園においても、子どもたちは遊びの中で、友達や教員がしていることを真似たり、一緒に楽しんだりしていろいろなことを学んでいる。一方、小学校の教室は、まさに共に学び合う場である。「協同的な学び」という視点は、人とのかかわりによる学びを連続的に考えようとするものである。

特に「協同的な学び」は、単に集団になって遊ぶだけでなく、友達と力を合わせて何かを創り出すという活動を想定している。これは、今の教育の中で求められている「生きる力」につながるものである。実際、小学校においても、生活科や総合的な学習の時間の導入により、自分たちで課題を見つけて探究していく体験的な学びが増えている。教科学習においても、子どもが自分で調べたり、友達と一緒に相談したりしながら取り組む子ども主体の授業が求められている。

「協同的な学び」は、この「生きる力」の育成を目指し、幼稚園から小学校へと積み上げていこうとするものである。

中教審では、幼稚園の5歳児で、少人数の活動を大切にしながら学級全体で行う活動へ幼児を誘うことを大切にしようと呼びかけている。5歳児は、集団にも慣れ、仲間意識も育ち始める時期である。学級で共通の目的に向かい、子どもたちがみんなで相談し、協力して活動する遊びを大切にしたい。その際、みんなでつくり上げるイメージをもつことができるようにすること、自分勝手にするのではなく役割や約束を決めて活動できるようにすること、力を合わせて創り出す喜びや楽しさが味わえるようにすること、友達のがんばりやよさを認め合えるようにすることなどを大切にす

た教員の様々な支援が求められる。

一方、小学校においても、幼稚園での「協同的な学び」の取組を受けて、様々な学習の中で、友達と協同で学びを展開していくことを大切にしていきたい。特に、小学校では、入学してきたばかりの一年生はまだ何も身に付いていないととらえてしまうことが、往々にしてみられる。幼稚園での様々な経験は、子どもたちに着実に多くの力を身に付けさせている。このことをしっかりと理解し、学習活動を組み立てていくことが大切である。

イ 「ことば育て」

近年、自分の思いを「言葉」で表現し、伝え合うことで友達とのコミュニケーションを図ろうとする力が十分培われていない状況がある。「言葉」を使って人とコミュニケーションをとる力もまた、小学校において急に指導を始めるのではなく、「学びの連続性」の視点を持ち、幼稚園教育の特性を生かした取組の積重ねを進めたい。

そこでまず、幼稚園においては、遊びを中心とした総合的な指導の中で、「言葉」に対する感覚や、「言葉」で表現するといった「ことば育て」の活動を充実させ、言語活動の基盤を養うことが重要である。幼児は、夢中で取り組める体験を重ねることによって、言葉のもつ力（話すこと・聞くこと、書くこと、読むこと）を実感し、言葉を使って表現したり、伝え合ったりしたくなる。そのために、言葉の中に実感のこもったイメージをもつことができるような体験を保育の中で考えていきたい。

一方、小学校においては、例えば、国語科の「ことば」の学習と生活科の「学校を探検しよう」といった学習を関連付け、子どもたちの学校探検の興味・関心を、ひらがなや言葉の学習へと結び付けるような取組を大切にしたい。そうすることで、幼稚園での学びと小学校での学びの間に、一貫した流れをつくることができる。子どもたちは、学校探検の中で興味をもった対象をみつめながら、イメージをもって言葉を学ぶことができるのではないかと考える。

なお、子どもは、自分の気持ちを尊重してくれる教員の言葉や表情から、自分が受け入れられ大切に思われていることを敏感に感じ取る。そして、自分が大切にされているという安心感や信頼感に支えられ、他者に言葉を伝えようとしたり、他者の話を真剣に聞こうとしたりする。子どもの気持ちを尊重した言葉や表情を心がける教員の姿勢を、幼稚園においても小学校においても一貫して大切にするということも、子どもにとっての「学びの連続性」を実現するものであり、大切な「連携」であると考えられる。

ウ 「人とのかかわり」

兄弟の数が少なくなり、また、地域での群れ遊びも少なくなった。その一方で、「言葉がうまく出ず、すぐに手が出てしまう子ども」「どの仲間にも入れず孤立している子ども」など、人とのかかわり方に課題をもつ児童が多くなっている。これらのことが、人間関係のつまずきや問題行動につながる背景になっているとも言われ、今や、大きな教育課題の一つでもある。

この「人とのかかわり」にもまた、「学びの連続性」を大切にしたい取組を考えることができる。

幼児は、集団生活の中で、よい刺激を受け、影響し合いながら人とかかわる力を培っていく。保育の中で、トラブルがないことをよしとするのではなく、トラブルをチャンスとしてかかわっていききたい。特に、友達の気持ちや立場を考えて自己抑制する力は、小学校以降でも求められ、人間関係を築く上の基礎的な力の一つである。譲り合ったり、協力し合ったりして楽しく遊ぶことの心地よさと、トラブルを乗り越えることの喜びにも気付かせていきたい。そのためにも、ルールやきまりなどの約束事について体験的に学ぶ場面や集団参加を促す場面を積極的に設定し、集団生活のル

ールに気付かせることを通して、社会性の基礎を培っていききたい。

一方、小学校では、幼児期に培われた社会性の基礎を大切に、更に、教え合ったり、考えや考え方を学び合ったりする「子ども同士の教育力」を教科や特別活動、総合的な学習の時間などに生かしていくことが大切である。

(4) 幼稚園と小学校の相互理解を深めるために

「学びの連続性」を踏まえた連携について述べてきた。幼稚園では、目の前にいる子どもが、これから先、生涯にわたってどのような力を身に付けていくのか、そしてそのために今、幼稚園でどのような力を付けておくことが大切なのかを考えながら、保育を組み立てていく必要がある。一方、小学校では、幼児の学びの基礎を積極的に受け止め、幼稚園での指導の工夫や配慮を知った上で、幼稚園での経験を生かした授業づくりへの努力が必要である。そうすることによって、子どもの学びに連続性が生まれ、幼稚園においても、小学校においても、子どもたちの学びはより広く、深いものとなるのである。

そのためには、幼稚園の教員は小学校のことを、小学校の教員は幼稚園のことをしっかりと相互に理解し合うことが大切である。

相互理解を深める一つ的手段として、実際に保育や授業を通して幼児の生活や児童の学習に直接ふれることが効果的であると考え。教員が幼児児童と直接かかわることで、幼児児童のそれぞれの発達を理解し合うことになる。また、教員同士の一体感と指導の連続性・一貫性を生むことができる。互いの研究会や研修会に積極的に参加したり、一緒に研究授業・保育を計画したりして、教育の内容やねらい、学び方のつながりを知る機会を大切にしていきたい。

4 おわりに

幼稚園から小学校への滑らかな接続を目指し、学びの連続性を図るためには、幼稚園の教員と小学校の教員の一人一人が幼稚園教育と小学校教育の全体の流れをつかみ、その流れに一体感をもつことが大切である。そのためにも、先にも述べたように、互いに自らの教育を積極的に公開して伝えていく必要がある。

また、学びの連続性の視点に立てば、「連携」は、幼稚園と小学校、小学校と中学校のそれぞれの間にあるのではなく、幼稚園から小学校、中学校という全体の流れの中にあるべきものではないだろうか。子どもの学びという視点に立ち、互いの教育への理解を深めながら、それぞれの教育の役割をしっかりと果たしていきたい。

参考・引用文献

- | | | | | |
|-----|-----------|---------------------------------------|--------|-----|
| (1) | 文部省 | 幼稚園教育要領解説 | フレーベル館 | 平11 |
| (2) | 文部科学省 | 幼児教育振興プログラム | | 平13 |
| (3) | 無藤隆・神長美津子 | 幼稚園教育の新たな展開 | ぎょうせい | 平15 |
| (4) | 中央教育審議会 | 子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について(答申) | | 平17 |